
ネギま！－1/100の転生者－

ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！—1／100の転生者—

【Nコード】

N9043X

【作者名】

ユウ

【あらすじ】

ドラクエの世界に行くと思違いしてドラクエの能力を貰って異世界に行ったら、行先はネギま！の世界だった！しかも、母親はエヴァ！？…………主人公はネギま！を知らないという設定です。100%自己満足でキャラ崩壊しまくります。それでも良い方はよろしく願います

第1話（前書き）

小説名を『俺はエヴァの息子で弟で兄で恋人で夫である』のどっちにしようか迷った

正直どうでも良いことですね！

第1話

真っ白な世界に、20代くらいに見える男性と白髪が目立つ老人がいる

2人はテーブルを挟んで座っている

「要するに、俺は新しく創り出される世界の住人の1人に選ばれたと？」

男性がテーブルに置いてあったお茶を飲む

男性は新しい世界に転生する100人の1人の選ばれたのである

「そうじゃの。元々の世界では、お主の潜在能力の1%も出せんからの。十分に発揮できる世界に送ってやろうと思ってるの？」

老人はお茶ではなく、羊羹を食べて話す

「確かに何をやっても、物足りなかったからな」

顎に手を当て思い出すような仕草をする男性

「どうかの？今はまだ世界の時間を止めてるだけだから、元の世界に戻す事も出来るが？」

何処からか資料を取り出して、パラパラと捲る老人

「その前に質問だ」

「なんじゃ？」

老人は資料から男性を見る

「もし俺がソッチの世界に行ったら、元の世界ではどうなるんだ？」

「いきなり消えたら問題になるからの。少しずつ皆の記憶から消えていく。消えていく間は人形が過ごす。人形は人間の様に過ごして段々と皆の記憶を奪うのじゃ」

「俺の事を忘れるなら、平気か？・・・送ってもらって大丈夫だ」

男性は下を向いて少し考えてから、老人の方を真っ直ぐ向いて言い切った

「あい、わかった！では、お詫びとお礼と感謝で何か能力を与えよう♪」

嬉しそうに書類に何かを書く老人

「能力の前に、行く世界ってどんな世界だ？」

「うむ。モンスターが存在して、人間が戦う世界だ。魔法も存在するぞい！」

「・・・（モンスター、人間、戦う・・・ドラクエか？）実はゲームや漫画の世界がモデルだったりするのかな？」

男性は、この場所に呼ばれる前にドラクエ？をやっていたので、一番最初にドラクエが思い浮かんだ

因みに男性の好きなドラクエの漫画はダイの大冒険である・・・ポ

ップがダイの記憶をよみがえらせる為に死んだのが感動的だ!!

「そうじゃ。名前はわからんがの・・・因みに平行世界じゃからの。好きにして良い」

老人が肯定する

それにより何故か男性の中では、『行く世界』Ⅱ『ドラクエの世界』という構図が出来ていた

「因みに能力の数は？」

「能力なら3つじゃの。お詫びとお礼と感謝じゃからな。物なら倍じゃ」

老人はチラッと男性を見ながら言う

「んじゃあ、決まった！」

「ほう？」

老人は驚いた

普通なら「少ない増やせ」と騒ぐと思っていたからだ
それにより、老人は少し男性に興味が出始めた

「では何じゃ？」

「一つ目は『めだかボックス』の『完成』ジ・エンドで制限無し
二つ目は『Fate』の『アーチャー（エミヤシロウ）の全能力』
三つ目は【モノ】で『TYPE-MOON』の『シキ（遠野 志貴・
両義 式）の目』と『舞-乙HIME』の『マシロの最終武装』」

「・・・・・・・・」

男性が要求したら、老人が固まった
まさか条件を逆にとられるとは思わなかったのだ
能力1つと言ったら『魔力無限』や『強靱な身体』などである
それを『――の全能力』となると、複数の能力になる
本当は、男性はそこまで考えてなかったのだが・・・ドラクエの能力を欲しがらなかったのは、向こうに行けば魔法との契約で何とかなると思っっているからである

「駄目・・・か？」

不安そうに老人に聞く男性

「・・・・・・・・ん？・・・大丈夫じゃよ」

正氣に戻った老人が、さらに書類に書き足す
その時老人の口元は、面白そうに歪んでいた
しかし、下を向いているので男性には見えなかった

「・・・よし、出来たぞい？・・・時期はどうする？星誕生からか？」

星誕生

誰も居ない、男性1人だけである

「それは嫌だよ。普通に人間がいる時代が良いな」

「ふむ」

ジッと男性を見る老人

「なんだ？」

気まづくなったのか、男性はモジモジする

「容姿はどうする？好きにする事が出来るが？」

「あゝ・・・あんたが決めてくれ」

男性は考えようとするが、直ぐに諦めて老人に任せた

「では、男の娘で良いな♪」

サラサラと書類に書く老人

書類に書かれる事は、男性の全てのようだ

「・・・・・・・・ゑ？」

男性の顔色が悪くなる

「なんじゃ？」

ニタニタと笑いながら聞く老人

「今、発音がおかしくなかったか？」

「そうかの？・・・まさか女の子が良かったのか？」

驚愕！といった感じで老人が言う

「男の娘と女の子のドッチかしかないのか！？」

「そうじゃ。・・・ドッチにするんじゃ？」

急かすように言う

表情は楽しそうにニタニタと笑っている

「・・・男の娘で」

悔しそうに表情を歪めながら言う

「決まりじゃな♪」

資料を閉じて立ち上がる老人
男性も続いて立ち上がった

「そうじゃ、名前はとうする？」

「適当・・・志貴^{しき}だ。志す高貴なる者で志貴」

始めは、まだ老人に任せようとする男性
しかし、さっきの事を思い出して自分で考えた

「完成じゃな。名字は何処かの家族で産まれるからランダムじゃな」

「わかった」

「じゃあ送るぞい！」

老人が軽くペンを振った
そしたら、男性の足下に穴があいた

「ちょっ！」

「頑張るんじゃぞ」

男性が悲鳴をあげながら、落ちていく
老人は楽しそうに穴の中に向かって手を振る

「あやつが何をするか楽しみじゃの♪」

テーブルの上にテレビを出して、老人は男性の新たな人生を見始めた

「男の娘っと言うのは嘘なんじゃが信じておったの。あやつに与えた能力に手を加えたのだが・・・気付くかの？」

老人は手元の資料を見て楽しそうにほほ笑んだ
資料には『魔力保有量Ⅱ^{アラヤの抑止力}霊長の抑止力としてのエミヤ』と書いてあった

—side・エヴァー—

「ゴ主人、ソイツドースンダ？」

・・・どうしてこうなった？

チャチャゼロの『ソイツ』とは、私の腕でキャツキャツと笑っている赤ん坊の事だ

もう一度言おう・・・本当にどうしてこうなったのだ！？

「チッ！・・・厄介な事に巻き込まれたな」

私は舌打ちをしながら、赤ん坊を抱き直した
少し前のことを思い返す

旧世界の日本に観光で着ただけだったのだが・・・名も解らない村
が東洋の鬼に襲われているのを知った

面白半分で見学に来ったら、村は壊滅していた

「ナンダヨ！モウ終ワツテンジャネエカ！！」

私の横で愛用のナイフを弄びながらつまらなそうに言うチャチャゼロ

「そんな大きくない村で、隠れるようにあったからな。特別な理由
があったのだろう」

辺りは肉の焼けた匂いで充満している
生き残りは居ないだろう

——ガタッ！

振り返って帰ろうとしたら何かの崩れる音がした

「マダ楽シメルカ!？」

「おい、待てチャチャゼロ!」

チャチャゼロが私を無視して嬉々として音がした方に駆けていった
まったく、あいつは・・・戦闘狂が!

「う・・・だ・・・だれか・・・」

チャチャゼロの後を追っていったら、家に下半身を押し潰された女性
性を見つけた

女性の腕には生後1ヶ月ほどの赤ん坊が居る
赤ん坊は泣きもせず、ジッと母親を見つめている

「ナンダ。敵ジャネエノカ」

ケッ!と拗ねたように足元の瓦礫を蹴るチャチャゼロ・・・期待外
れだったのだろう

「ふんっ! 帰るぞチャチャゼロ!」

「ま、待って!」

今度こそ帰ろうとしたら、女性に止められた
鬱陶しいな
いったい何のようだ?

「・・・なんだ？」

家に潰されている女性を見下しながら問い掛ける

まあ、暇つぶし程度には構ってやるか

私は女子供を殺さないという信念がある

しかし、だからと言って助けると言う意味ではないからな

「お願い・・・い。この子を」

女性が赤ん坊を私に突き出してくる・・・この女は解っているのか？
私が誰なのかを・・・

「私は『闇の福音』、ダーク・エヴァンジェリ『人形使い』、ドール・マスター『不死の魔法使い』、マガ・ノスフェラトゥ『悪しき音信』、きおとすれ『禍音の使徒』、かいんのしと『童姿の闇の魔王』のエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだぞ？そんな悪の魔法使いに自分の子供を預けるのか？」

どうせ、私の正体を知ったら怖じ気づくだろう

しかし、女は・・・

「あら？・・・全然・・・気付かなかったわ・・・・・・貴女が誰であれ・・・子供が生きられるなら・・・そ、それで良いわ」

女は額に脂汗を浮かべながら、さらに子供を突き出してきた

「――ッ！」

・・・この女・・・両足が焼け落ちてる

両足が焼けて無くなるほどの激痛があるのに・・・我が子の心配だと

「・・・・・・・・わかった。子供は預かろう。子供の名は？」

「志貴・・・志しを持つ高貴の者で志貴よ」

「わかった・・・志貴は預かった。安らかに眠れ」

そして両目が蒼くて、全てを見透かす様ながある赤ん坊を受け取ったその瞬間に女は息を引き取った

「あの時は本当に何故受け取ったのだろう」

私の顔をペタペタと触る赤ん坊を見る

「ゴ主人。ソイツドースルンダ？」

チャチャゼロが私の頭の上から赤ん坊を覗き込みながら聞いてくる

「ふっ・・・私好みの子に育てるのも良いな」

「ゴ主人モ変ワツタナ・・・コノツ！」

チャチャゼロが赤ん坊に手を伸ばしたら、赤ん坊は嫌がるように手で叩いた

それに対してチャチャゼロはムキになって赤ん坊に触ろうとする

「私の気持ちを変えたのは母親だろう・・・母は強しと言うだろう」

私はキャツキャツと笑う赤ん坊の柔らかそうな頬をプニプニと突っ
つきながら呟いた

第2話（前書き）

エヴァがおかしくなったORZ

第2話

—side・志貴—

「人参とジャガイモをください！」

そう言って八百屋のオバチャンに籠を差し出した

「おや？志貴ちゃんじゃないか。お手伝いかい？」

「うん♪」

オバチャンは微笑みながら、僕から籠を受け取り野菜を入れ始めた籠に入れるのを待ってる時間に今までの事を説明しよう！！

年月は、僕がお母さんエヴァンジェリンに拾われて二年が過ぎた

僕の意識？が覚醒したのは一年半前・・・生後半年くらいだ

完成の影響か、その時期からもう歩き始めて片言だけ喋れた

その時のお母さんエヴァンジェリンのハシャぎようはハンパなかった

忍野忍風に言う「ばないの！」だ・・・言ってみただけだ
「私好みの子にしてやるからな！」と指差しながら言われたほどだったし

本人に言っちゃ駄目でしょ？

一応魔法も教えてもらっているのだが・・・鼻息が荒いんだよね
後ろから抱き付く様にして、杖を持ってる手に重ねてくる
密着しすぎだね

ある時「暑い」と言ったら、悲しそうな目をして離れた
チャチャゼロが「・・・アンナニ落ち込ムゴ主人ハ初メテダ」と言うほどだ

そして半年前に日本でアパートを借りて住み始めた

一応お母さん（エヴァンジェリン）には幻術で大人になってもらって母子家庭を演出している

「お母さんは今日も仕事かい？」

野菜を入れ終わったのか、オバチャンが籠を渡しながら聞いてきた

「うん！今もお店で働いてるよ！」

只今エヴァンジェリンはツンデレ喫茶で働いています（笑）

「今日はネギとタマネギをサービスしといたよ。お母さんと食べなよ」

「・・・うん、アリガトー」

おっと、チャチャゼロカタコトになってしまった

お金を渡してからお礼を言い、オバチャンに手を振りながら帰った・
・ネギとタマネギどうしよう

「ただいま」

「オウ！オカエリ！」

番犬（剣）のチャチャゼロが迎えてくれた

「酒ハアルカ？」

トテトテと歩いてきて籠の中を覗き込むチャチャゼロ
ぶっちゃけ僕とチャチャゼロの身長は同じくらいか、少し僕の方が
高い

「夕飯の買い物だけだから買っていないよ。それにまだ前に買ったの
があるでしょ？」

チャチャゼロを押しつけて野菜を冷蔵庫の野菜室に入れる

「チビチビ吞ンデモ、吞ンダ気ガシネーンダヨ！」

酒の事で愚痴りながらも横に来て入れるのを手伝ってくれるチャチ
ヤゼロ

「焼酎はちびちび吞むのが通なんだよ？お母さん（エヴァンジェリ
ン）もそうやって吞んでるじゃん」

「デモヨー」

「文句言わないの」

基本金銭のやりくりは僕がやってる

ワインをカバガバ吞まれたら火の車だからね

何かしらの理由を付けて、安い酒で我慢させてる

チャチャゼロは暇さえあれば酒を吞むからね

因みにお母さん（エヴァンジェリン）は別荘を使いたくないらしい
だから別荘の中のワインなどは手付かずだ

一度チャチャゼロが別荘に入ったワインを持って来た時に、お母さ
んが「これは志貴が大きくなったら一緒に吞むんだ！」と言って取
り上げてたな

チャチャゼロもその一言で納得して「ジャ、仕方ネーナ」って言うてた

悪とか言ってるわりには身内には甘い2人なんだよね

「オイ志貴・・・たまねぎトねぎガ入ッテルゾ？」

タマネギとネギを持って、微妙な表情で俺を見てくるチャチャゼロ・・・うん、僕も同じ気持ちだよ

「サービスしてもらったんだよ。いらないって言うわけにもいかなからね・・・お母さんには見つからないようにしないとね」

二つを念入りに奥に押し込む

今日の夕飯は何かな？

人参、ジャガイモ、鶏肉・・・カレー？

タマネギ無しだけど

「終ワッタナ？」

「うん」

チャチャゼロが籠に頭を突っ込みながら聞いてきたので頷く

「ジャア、アノ残酷ナあにめヲ見ヨウゼ！」

チャチャゼロがスキップをしそうな勢いで居間の入って言った因みにチャチャゼロの言う残酷なアニメとは『アンパンマン』であるチャチャゼロ曰わく「自分の顔を千切って喰わせるなんて・・・！」らしい

僕としてはドコが残酷なのか良く解らない

僕から言わせてみれば戦隊モノの方が残酷だと思う
1体5・・・虐めじゃね？

「あまり近くで見たら駄目だよ？目を悪くするからね」

居間に行く前に洗面所に行って手洗いをする

そして目の前の鏡を見る

当たり前に鏡に僕の姿が写る

・・・まだ二歳だからね

可愛い顔でも問題ないはずだ

いくら男の娘だと言ってたから、かなり焦ってたけど普通の何処に
でもいる男の子だった・・・・・・・・実は男の娘が楽しみだったんじ
ゃないんだからね！？

因みに鏡には黒髪で、男のくせに細くて弱々しい姿が写っていた

—side・エヴァー—

今の時間は、午後8時

仕事を終わらせて志貴が居る我が家へ急いでいる

「・・・フツ」

自然と頬がニヤケてしまうな
帰る家があり、私を待っている者が居る

今まででは考えられない状況だな

悪の魔法使いである私が息子であり弟であり恋人（予定）であり夫（未定）である志貴と暮らしてからは、光の中で過ごすのも悪くないと感じている

志貴は天才で鬼才で優秀な子だ

まだ二歳なのにシツカリしているしな・・・甘えてくれないのが難点だがorz
呼び方もお母さんだ

確かに息子ではあるが、私的にはエヴァと呼んでほしいのだ
まあ、今は待つさ

きつと志貴から私に愛の告白をしてくれるだろう

その時までには不老不死、もしくは不老長寿の薬を開発しなければな・・・使用する時は志貴の判断に任せるが

しかし、それだと私が独占欲が強い女だと思われないだろうか？

やはり志貴に嫌われるのは少し・・・かなり！！嫌だな

「むっ・・・もう着いたか」

志貴の事を考えながら帰ったらあつという間だったな

チャチャゼロは・・・お邪魔虫だな

私と志貴の恋路（独り善がり）を邪魔する奴だ！！

一度チャチャゼロだけを別荘に隔離しようとしたら志貴に怒られたな

「チャチャゼロが可哀想だよ！」と頬を膨らませながら・・・あれば微笑ましいモノだった！！

「はうっ！！」ビクッ

自分の体を抱き締めてよがる
いかん！

愛（鼻血）が溢れてきてしまった
早く志貴分を補充せねば！！

「今帰ったぞ！！」

扉を勢い良く開けて中に入る

「あ、おかえり」

床に座ってテレビを見ていた志貴が、愛らしく微笑んでくれる
私はコレ（志貴の笑顔）だけの為に生きていると言っている！！！！
今までの疲れも吹っ飛ばすぞ！

「し〜き〜♪」（ハァハァ）

幻術を解いて後ろから抱き付く・・・はぁ、癒される

—side・志貴—

・・・重い

お母さんに押し潰される

「お母さん、重いよ」

「おっと、悪かったな。それからお母さんではなく、エヴァと呼ばべ

と言ってるだろう？」

お母さんは口を尖らせながらも僕の上から退いてくれた

「そんな事より、お腹すいちゃった」

自分のお腹を撫でながら言う

「そんな事って・・・そうだな。今すぐ準備をするからチャチャゼロと待っててくれ」

一瞬悲しそうな表情になったけど、直ぐにエプロンを付けて台所に向かって行った

うーん・・・あの人は二歳児に何を求めているんだろう？

少し将来が不安になってきた

「そうだ。鞆の中に週間マガジンがあるぞ。読むだろ？」

それから速報です

この世界にもジャンプ・マガジン・サンデーがありました
やったね！これで続きが読めるよ！

「マガジン？・・・ああ、あの毎週水曜日に発売される雑誌だったね。あんな雑誌、僕は幼稚園の時に卒業さ——」

「なんだ？読まないのか？それに志貴はまだ二歳だろ。幼稚園はまだだ」

「——・・・読みます」

遮られた!!

男は黙ってライバルだ! って言いたかったorz

お母さんの鞆をゴソゴソあさってマガジンを取り出して読む

今週のフェアリーテイルどうなったかな?

第3話（前書き）

時系列とかは特に考えてません。

ぶっちゃけると作者はネギま！の当時の連載漫画を覚えてません。

r
z

なので、とにかくマガジンで連載されてて有名な漫画ということで、フェアリーテイルを出しました。

今回は連夜の名字と、いつ頃なのかを書いてみました。

感想・質問・その他などど受け付けますので、これからも宜しく

お願いします m (_ _) m

第3話

—side・志貴—

あれから一年が過ぎました。

一応報告なんですが・・・僕名字が無かったんですね。

名前を呼ぶのはお母さんだけで、他の人達はシキ・マクダウエルだと勘違いしてました。

まあ戸籍とか無いのでしようがなかったんですけど・・・orz
なので、正式に名字が決まりました。

七夜 しきや 志貴 しき です！

そして、一年の間に何があったかと言うと・・・アパートを半年前に解約して世界中を旅する事になりました。

・・・結局あのアパートには一年しか居なかったんだ。

旅をする事になった切っ掛けは・・・僕の我が儘だったりする。

「旅行したい」と呟いたら、お母さんが「よしっ！では出掛けよう！！今すぐ出掛けよう！」と言って、その日の内に荷物を別荘に入れてアパートを解約したからね。

初めは日本をゆっくり見て回ってただけだったけど・・・どうというわけか、今お母さん（幻術版）と大戦の英雄ナギが浜辺？海辺？で向かい合っている。

お昼寝をして目が覚めたらこの状況でした。

寝る前には英雄ナギは居なかったはずなんだけど？

僕は2人から離れて観戦中です。

「どちらが最強か決めようではないか!？」

右手に糸に吊されてるチャチャゼロを持ちながら宣言する。

「はっ！あの闇の福音が子持ちの親になってたとわな！」

英雄ナギはお母さんの正面に立って不適に笑いながら言う。

「志貴は私の子供ではあるが、弟であり恋人であり夫だ！」

ムキになって怒鳴るお母さん・・・何にムキになってるんだろう？

「・・・バツイチが」

口元を吊り上げながら、意地の悪い笑みを浮かべる英雄ナギ。
お母さんはバツイチと聞いて、俯いてプルプルと震えだした。

「貴様・・・クロス！」

あっ・・・涙目だ。

後で慰めてあげないと・・・ほっといたら拗ねるんだよね。

「志貴合図を頼む！」

「ポーズ！頼むぜ」

お互いに少し腰を落として、独自の構えをとった
本当にどうしてこうなったのかな？

まあ、最強クラスの闘いを見れるからいいんだけどね（笑）

「ふう・・・ンッ！」

―改神モード（未熟）―

やっぱりまだ駄目だな。

原作みたいに完璧じゃないや。

僕の改神モードは幾つかの制限があるんだよね。

1・発動中は体を動かせない

文字通り指一本動かせない

動かしたら発動が解ける

喋る事は出来るけどね

2・上がるのは観察力と理解力だけ

これは動けないから問題ないんだけどね

3・発動時間は長くても30分だけ

これも戦闘とか無いから問題ない

一応乱神・廃神モード（未熟）にもなれるけど・・・あればヤバ過ぎる。

乱神は気が付いたら体中ボロボロで寝込んでた。

チャチャゼロもボロボロだったと言っておこう

廃神は・・・超鬱状態になりました。

マイナス思考になりすぎて自殺しようとしてたし・・・お母さんに泣きながら止められました。

僕の廃神は根本的に原作と違うと思うんだけどね。

「じゃあ・・・始め！」

僕の合図で2人が距離を詰めた。

2人の闘いを見ながら、僕は少し前の事を思い出す。

多分あの日あの時あの言葉のせいで、こんな状況だと思うからだ

―二時間前―

僕はお母さん、チャチャゼロと一緒に北海道で蟹を食べている。

僕は蟹って嫌いなんだよね・・・食べ辛いじゃん（笑）

僕は忍野メメが格好いいと思います！！

いつか忍野連夜に改名して、お母さんを忍野忍にするんだ！

僕的にはキスショットよりも忍ちゃんの方が好きなんだよね（笑）

・・・話が逸れた

とにかく僕は――

「クソッ！身が取り出せない！」

蟹の殻から身が取り出せないんだよ！

力が弱いから殻を割る事も出来ないから、ほじくるしかないんだよ！！

「ケケケッ！ウメーゾ？」

僕とお母さんの間で、他の人から見えないように蟹を殻ごとバリバリと食べるチャチャゼロ。

そのドヤ顔が腹だたしい！！

僕はこんなにも苦労してるのに#

「か、髪がウネウネと動いてるぞ！大丈夫か！？・・・ほれ、私が取ったのを食べるがよい」

「・・・・・・・・・・」パクパク

「・・・睨ミナガラ、蟹ヲぱくツクンジャネーヨ」

横目でチャチャゼロを睨みながら蟹をパクつく。

蟹は嫌いだ！食べ辛いからね！・・・けど美味しいよ（涙）

「最後は蟹味噌じゃな・・・どれ？」

蟹の胴体？を半分に割って、スプーンで蟹味噌をすくって食べるお母さん

「・・・ムッ！」

口に含んだ瞬間、微妙な表情になった

「・・・不味い」

お母さんは永遠ロリの肉体年齢10歳だからね。

味噌とかが衰えて無いんじゃないかな？・・・ワインは美味しそうに呑むのに

「ゴ主人、俺ニモクレヨ」

「チャチャゼロはこれでも食べてなよ。高級なウニの味がするんだよ」

チャチャゼロに醤油の入ったプッチンプリンを渡す。

僕は食べた事無いけど本当なのかな？

「ソウナノカ？ジャア、貰ウゼ・・・ドウヤツテ食ベルンダ？」

「プリンと醤油をグチャグチャに、かき混ぜるんだよ」

チャチャゼロは疑いもせずに実行する。

チラッとお母さんを見たら、またもや微妙な表情でプリンと俺を見た。

「そのプリンどうしたんだ？」

「一週間前に買ったヤツだよ。ずっと別荘に入れてたから・・・単純計算で168日過ぎてるね（笑）」

チャチャゼロが口に含んだ瞬間に衝撃的な事実を言う。

24時間×7日だからね。

賞味期限なんて過ぎて、消費期限も過ぎてるよ（笑）

チャチャゼロが錆び付いたブリキのようにギツギツと擬音？を出しながらコツチを向いた。

「あれ？チャチャゼロは信じたの？家族のチャチャゼロにそんな事するはず無いじゃん！」

「ソウダヨナ。ソナ事シネーヨナ」

安心したようにプリンを食べるチャチャゼロ

「まあ、嘘だけどね」

「ウオオイ！」

「チャチャゼロ五月蠅いぞ？静かにしろ」

チャチャゼロが叫びながら立ち上がった瞬間に、お母さんが笑顔（目が笑ってない）で頭を押さえた。

「冗談だよ。プリンはこの店のデザートにあったのだよ」

チャチャゼロにメニュー表を見せながら説明する。

そして本当に安心したように肩を落とすチャチャゼロ。

チャチャゼロって人形に思えないんだよね。

「それにしてもこんなに騒いでるのに良くバレないな？」

周りを見ながらお茶を飲むお母さん。

普通だったらチャチャゼロ動いてるのがバレて大騒ぎだからね。

「変装？と認識阻害、防音の魔法を使ってるからね。周りには母親と兄妹にしか見えてないんだよ」

クソッ！

やっぱり殻が固いな！

「・・・志貴が魔法を使ってるのか？」

おや？

お母さんが驚いた表情をしている？

「そうだけど、どうしたの？」

「三歳にも満たないのに、もう魔法が使えるとは」

・・・やっぱり早いんだ。

僕1人だから比べる相手が居ないから解らないんだよね。

お母さんに教わってるんだから、お母さんと比べてもしょうがないしね。

だから、完成^{ジェンド}がどの様に発動してるのかも解らない。

「・・・魔法で思い出したけど、五年前にあった大戦あって、その時活躍した紅き翼ってグループが最強って言われてるらしいね。特にリーダーのナゼ？・スプリングフィールドが・・・それにしても、ナゼって名前なんて可哀想だよね？」

おっ！

やっと殻から身を取り出せたぞ！！

「・・・最強なのは私だ。近々その事を証明してやろう！」

不適に笑いながら、蟹味噌を食べるお母さん・・・やっぱり微妙な表情になった。

そう言えば、お母さんは負けず嫌いだったね。

「志貴は、そんな情報どうやって知ったんだ？」

「えっ？・・・お母さんがトイレに行ってる時に、あの人から聞いたんだよ？」

そう言って、少し離れた場所に座って蟹を苦勞しながら食べてる赤毛の男性を指差した。

「・・・ほう」

お母さんは目を細めて、スタスタと赤毛の男性に近付いて行った。

何をする気だろう？

「おいっ！」

「んだよっ!？」

いきなりお互い喧嘩腰だな!？

「少し顔を貸せ」

腕を組んで見下すように言うお母さん。

「へっ・・・上等だ！」

赤毛の男性はガタツと音を立てながら立ち上がった。

端から見たら美女と美男子が見つめ合ってる絵なんだよね・・・

・口元が蟹で汚れてなければorz

「「蟹を食べ終わった後にな!!」」

あっ・・・ちゃんと食べ終わった後なんだ

そして現在2人(＋1体?)は魔法でドンパチしている。

僕があんな事を言わなければ、こんな事にはならなかったのに・・・

・・・なんで英雄ナギは僕が魔法関係者だと気付いたんだろうか？

「千の雷!!」

「おわるせかい!!」

どうやら2人の戦いは、まだまだ続きそうだ。

「人払い結界を張ってるけど、隔離結界も張っとかないとバレちゃうな」

一度改神モードを解いて、半径1キロの円形の隔離結界を張った。高レベルの戦いを見れるのは嬉しいけど・・・周りが見えてないんだね。

動けない僕の横を2人の魔法が通り過ぎて行くのを、冷や汗をかきながら見続けた

第3話（後書き）

ハーレムのヒロインって決めてないんですよ

エヴァをハーレム要員にするか、母親にするかも検討中です

それから1／100の意味は、ネギま！の世界に來た百人の一人って意味です

百の異世界ではありません

第4話（前書き）

次回から後書きに魔物語を書いてみたいと思います

内容は物語シリーズをネギま！のキャラで再構築するだけです
因みに、阿良々木役は連夜です

第4話

—side・志貴—

お母さんと英雄ナギが戦って1ヶ月が過ぎた。

あの時の決着は、どっちも動けなくなって引き分けだった。

お互いに倒れながら「へっ、やるじゃねえか」「ああ、貴様もな」と、何処の熱血漫画だよ!!!って感じだったね。

それから1ヶ月はお母さん、英雄ナギ、チャチャゼロの4人で旅をした。

お母さんと英雄ナギは、1日一回は戦ってたけどね。

成績はお母さんが11勝、英雄ナギが11勝、引き分け8回・・・互角の戦いなんだよね。

一緒に旅をしてる間は英雄ナギにも魔法を教えてもらった・・・説明が下手だけど。

教える時に、擬音で説明するんだよね。

「グって感じでドカンだ」とか、「ガっていつてヒュンだ」とかね。全然解らんって!!

最終的には「・・・よしっ! 実戦組み手だ!!」って言って模擬戦になるからね。

僕的には完成ジエンドがあるから、模擬戦の方が効率が良いけどね。

そんな感じで過ごしてた・・・僕が英雄ナギに魔法を教わってる時のお母さんは隅でイジケてた。

そして今は——

「親子丼3つお待たせしました」

いまだに北海道で食べ歩いています♪

因みに北海道の親子丼は、鶏と卵じゃなくてサーモンとイクラなん

だよね♪

「いただきます」

ちゃんと手を合わせてから親子丼を食べ始める。

それからチャチャゼロは鞆の中に居たりする・・・騒がしいんだもん。直ぐに英雄ナギに戦いを挑んじゃうから、止めるのに苦労するんだよね。

お母さんと英雄ナギも僕に続いて親子丼を食べ始めた。

2人の食べる姿を見て思ったんだけど・・・2人とも箸を使うのが上手いんだよね。

お母さんは500年だから、納得できるけどね。

「そう言えば、お前らはこれからどうするんだ？」

唐突に英雄ナギがお母さんの方を見ながら話し掛けた・・・長いからナギでいいか。

「どうとは何だ？主語が無いぞ。」

食事を中断されたのが不服なのか、少し睨みながら答えるお母さん。確かに主語がないね。

「いやさ？これからも2人で過ごすのか？」

少し気まずそうに言うナギ・・・なんとなくわかったぞ。

「当たり前だ。私と志貴はずっと一緒だ。あと15年もしたら連夜も不死になるしな。」

フフンっと腕を組んで笑いながら言うお母さん・・・不死の事は初耳だよ？

ってか、不死ってそう簡単になれるものなの？

「・・・本当に・・・本当にそれで良いのか？」

ヘラヘラしているナギではなく、真面目な感じでお母さんに問い掛ける。

お母さんは気まずそうに表情を曇らせた。

「本当にそれで満足か？・・・エヴァ、お前は『只の悪の魔法使い』じゃないんだぞ？」

バンツ！！

「そんな事くらい解っている！！」

ナギの言葉で、お母さんがテーブルを叩きながら怒鳴った。

自分でも解っている事を他人に指摘されて自分に怒ってるんだな・・・しかも自分ではどうにもならない事だから尚更だね。

「お母さん・・・周りから注目されてるから落ち着いて」

隣に座っているお母さんの手をギュッと握りながら言う。

その時に無詠唱で認識阻害の魔法を発動する・・・いつも僕が尻拭いするから、認識阻害魔法は上達したんだよね。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・ふう・・・。。。。。。それで貴様は何が言いたい？」

お母さんがナギに殺気を放ちながら問い掛ける。

「僕の事だよね？今までと違って僕が居るからだよね？」

僕はニツコリ笑いながら、2人の顔を交互に見ながら言う。
それに対して2人は――

「――っ!!」

「・・・ふう」

お母さんが驚いた顔をして、ナギは残念そうな顔をした

「・・・志貴は頭が良くて天才だと思って喜んでいたが、その事で
悔やむ日がくるとわな」

お母さんが悲しそうな顔で僕を見てくる。

「僕はお母さんの弱点だ。僕が居る事でお母さんが危険になるからね。守りながら戦う事は難しい。お母さんは僕を危険な目にあわせたくないからと自分を盾にするから」

僕は椅子の上に立って、お母さんの頭を撫でながら言う。

「・・・志貴」

それにより今にも泣きそうになるお母さん。

「志貴の方は決意があるみたいだな」

背もたれに体を預けながら呟くナギ。

「うん・・・だから英雄であるナギにお願いがあるんだ」

「・・・言ってみろ」

僕はナギを真っ直ぐみながら言い、ナギは上を向きながら目だけを僕の方に向けながら言ってきた

「僕とお母さんを――――」

――side・エヴァ――

私達は親子丼を食べ終わって、宿泊している旅館に戻るとナギと別れて連夜と一緒に部屋に戻った。

志貴は私の前で温泉に入る準備をしている・・・・・・志貴が覚悟を決めたのだ。

私も覚悟を決めなければならないな。

「志貴、久し振りには一緒に入らないか？」

「・・・えっ？」

志貴がキョトンとした顔で私を見返してくる

志貴が一歳を過ぎてから、一緒に風呂に入っていないからな。

「駄目か？」

「いや・・・別に良いけど」

戸惑いながらも承諾してくれた。

今日はいっぱい志貴に甘えよう！・・・普通は逆なのだからなorz

「なら少し待ってくれ。私も準備をする」

志貴に背を向けてタオルと着替えを取り出して準備をする。

この旅館は露天風呂があり、今は秋だから色鮮やかな紅葉が綺麗で眺めが良い。

「では、行くぞ」

「うん」

私の後ろを小さな私よりさらに小さな志貴が、チコチコと早足で来るのを確かめながら風呂場に向かった。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

私と志貴は無言でお互いの背中を洗ってから、露天風呂に浸かった。湯に浸かって10分くらいたつが、いまだに無言で紅葉を眺める・・・少し気まずいな。

「・・・僕はお母さん・・・エヴァに感謝してるんだよ」

唐突に志貴が話し掛けてきたので、首だけを動かして志貴を見る。志貴は私の方を見ないで紅葉を見ている。

「僕を本当のお母さんから預かってくれた事、3年間も僕の事を大切に育ててくれた事をね・・・時々おかしくなるけど」

真剣な表情で私の顔を見ながら言う連夜。

最後は恥ずかしそうに、はにかみながら言ったが・・・おかしくなる自覚はあるがな。

「お母さんが僕のために、地位や名誉？などを捨ててくれたように、僕も捨てても良いと思ってるんだよ？」

そ・・・それは・・・まさか！！

「志貴は・・・わ、私の息子であり、弟であり、恋人であり、夫を辞めると言うのか？」

志貴の両肩を掴んで聞く。

クッ！視界が歪んで志貴がぼやけてしまう！

「ちよっ！何でそんな話になるの！？それに肩が痛いよ！落ち着いて！」

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・ふう」

志貴に言われて深呼吸をして、気持ちを宥める。

「僕に地位や名誉とか無いからね。僕が捨てるのは人間である事だよ」

志貴がニツコリと笑いながら、戸惑うことなく言ってきた・・・人間をやめるだと？

「同じ吸血鬼になって不老不死になるんだよ」

「馬鹿な！有り得ない！！吸血鬼になるなんて無理だ！真祖の吸血鬼になる秘術はもう存在しないんだぞ！？」

勢い良く立ち上がりながら言う。

私を真祖にした男の資料も、男と一緒に灰にしたからな。

「そうだね。『真祖』になるのわね・・・風邪引くよ」

志貴が私の手を掴んで温泉に浸からせる。

真祖で無い吸血鬼・・・っ！！

「駄目だ！それだけは駄目だ！！」

「でも、それしかないんだよ。僕が吸血鬼になる方法は・・・
・・・エヴァに血を吸われて眷属になることだよ」

「っ！そ・・・それだと！」

「そうだね。絶対服従で、最悪自我が無くなるだろうね。でも、僕はそれでも良いと思ってるんだ……この命はお母さんに助けられたんだからね」

「……………」

「お母さん？」

「……ハッ！」

今、志貴の微笑みに見とれてしまった。

「……何でもない。そうだな。しかし、志貴が二十歳を過ぎてから、また話そう。その時でも遅くないしな」

「うん♪」

それから笑顔の志貴を抱き締めながら、露天風呂を楽しんだ。

夜寝る時は、久々に志貴を抱き枕に出来たので熟睡してしまった♪

—side・志貴—

翌朝、僕とお母さん……エヴァは浜辺でナギと向き合うように立っている。

「本当にいいんだな？」

ナギが真っ直ぐ僕を見ながら問い掛けてくる。

「うん。昨日言ったとおり、ナギがエヴァを一時的に封印・無力化して、その間に僕をナギの弟子にしてくれ」

「エヴァは、それで良いのか？」

「……あぁ、かまわない」

僕がお願いした事は、『英雄であるナギがエヴァを封印した』と『英雄ナギには弟子がいる』と言う事実がほしいのだ。

多分、それにより世間的にはエヴァは退治されたと思う。

まさか英雄ナギが退治したとされるエヴァを退治するなんてなったら、英雄ナギを侮辱？する事にもなるからね。

これで当分はエヴァを守れると思う。

信頼できる組織に預ける事が出来ればなお良しだね。

正式に依頼できる事じゃないから、侵入者として対応されると思うしね。

その後に、英雄ナギの弟子・後継者の僕が『エヴァを監視する』と言う名目で封印を解いてずっと一緒にいれば問題ないと思う。

「最後に盛大に暴れさせてもらうがな！！」

いきなりエヴァが大量の魔力を垂れ流した。

「やけにご機嫌だな？」

「ああ……志貴がお母さんではなくエヴァと呼んでくれてるからな！！」

「……僕、結界張ってくるよ。」

ナギも軽く体を動かし始めたからね。
もう止められないよ。

2人の魔力が高くなっていくのを感じながら、最硬最大（誤字にあらず）の結界を張る
そして端っこで座って――

「・・・ふっ！」

改神モード（未熟）

さらに！

直視の魔眼＋魔力による視力の強化

最後だから良く見とかないとね。

2人は何かを話して、エヴァが先に動いた。

そしてナギは・・・・・・何かを確かめるように地面を叩いてる？

「・・・エヴァが落ちた」

落とし穴

古典的だよね。

ナギがネギとニンニクを落とし穴に入れ始めた。

僕は見てて面白いけどね。

「ふざけるなあ！！」

おおっ！

エヴァが落とし穴から魔力全開でナギを吹き飛ばした。

やっと此処まで声が聞こえたよ。

「おまつ！ネギとニンニクが苦手だっただろ！！」

ナギが起き上がりながら、驚いたように叫んだ。

ニンニクが効かないからね。

そりゃ驚くよね。

エヴァはゆっくりと落とし穴から飛んで出てきた。

「そんなの一年前に克服したわ！・・・私に見つかからないように、必死に冷蔵庫の奥に入れてる志貴を見た時・・・どれほど哀れだったか」

本当に悔しそうな表情をするエヴァ。

見つけた時は焦ったね。

申し訳なさそうだったし。

でも、それで食べるのは無理でも見るのだけは良くなったんだよね。

「母は強しってか！？」

ナギが飛んでるエヴァに突貫した・・・それから意味は違うと思うよ？

それから2人は魔砲合戦を始めた・・・花火みたいだった。

それから数日後、『闇の福音が英雄ナギによって封印された』と『英雄ナギが弟子をとった』と言う噂が流れた

第5話（前書き）

誠に勝手ながら、『神から貰った能力』『容姿』『名前』の三点を変えさせてもらいたいと思います
それに伴い前話も修正したいと思います。

本当にすいません

変更点

神から貰った能力

・完成^{ジエンド}

・マダラの目↓シキ（遠野 志貴・両義 式）の目

・最終決戦のマシロの装備

・ダイの全能力↓エミヤの全能力

容姿

黒神めだか↓七夜志貴

名前

七夜志貴

第5話

—side・志貴—

・・・確かに・・・確かに信用できる組織に預けるってのは考えたけどね？

コレは無いと思うんだよ。

「~~~~~」

「あっはっはっは」

「ふおっふおっふおっふお」

「・・・・・・・・」

エヴァがとある学園の制服を着て、小さい子のようにスカートを握りしめている。

ナギは涙を貯めながら、腹を抱えて笑っている。

洋梨ヘッドの爺さんがエヴァをジロジロ見ながら笑っている。

んで、僕がそんな3人を白い目で見ている。

まあ、とにかく——

「ナギは制服萌え、爺はロリコンってのが解ったよ」

「なっ！」

「ふおっ！」

僕の言葉に2人が驚いたように振り返った。

僕はエヴァに近付いて、皺になったスカートを直す。

「うん、エヴァ可愛いよ。似合ってる。」

見上げながら、背伸びをしてエヴァの涙を拭く。

エヴァは拒みもしないで、素直に拭かせてくれた。

後ろで爺が「あの闇の福音が・・・」とか呟いてる。

「おい、志貴。制服萌えってのは、どう言う事だ？ ああ!？」

ナギが僕にガンをつけてきた・・・だってねえ？

「何で学生にする必要があるのかな？ 明らかにナギの趣味でしょ？ ・
・ 因みにロリコンってのは、女子中等部に学園長室があるからだ
よ・・・この変態が!!！」

キッ!と洋梨ヘッドを睨みながら言う。

エヴァに何かしたら、その頭を摺り下ろしてやる!

「じゃあ爺さん、さっきも話したけどエヴァを頼むわ」

「うむ。了解した」

ナギが片手を上げて離れていくので、僕も急いで付いて行く。

「ちょっと待て! 私はいつまで此処にいるんだ!？」

エヴァの言葉で思い出したようにナギが振り返った。

それから少し唸って「そうだな」と自己解決したようにエヴァの方を見た。

「とりあえず三年だな。三年過ぎたら、一度志貴を連れてくる。それまで学生生活を満喫しろ」

後半意地悪く笑いながら言うナギ。

そういえば――

「・・・今思ったけど、エヴァって学校始めてだよね？」

「うむ。そうだな」

顎に手を当てながら、思い出すエヴァ。

「じゃあピカピカの一年生だね♪友達百人できると良いね♪」

「志貴にまでからかわれた！」

「あ、あとそれから・・・」

「な、なんだ？・・・まだ何かあるのか？」

ワナワナと震えながら、涙目で近付いてきた。

「レースとかの下着は辞めて・・・正直似合っていないから。無理して大人ぶってる痛い子供にしか見えないから」

気まづくなつて、エヴァから目を逸らす。

それだけ言って、逃げるように歩き出す。

後ろでエヴァが「志貴に変態だと思われてた！！」と叫んでるが、全然気にしない！！

「お前って意外とSだったんだな」

隣に来たナギに呆れ顔で言われた。

「人をからかうとウキウキするんだ!!」

「出会って一番の笑顔だ!」

「そんな事より、これから何処に向かうの?」

「ん?・・・ああ、コレの処」

腹立たしいくらいの笑顔で、小指を立てながら言われた。

僕の頬の肉が引きつってるのが分かる。それから移動の間中、頬が緩んだままノロケられた。

・・・移動中・・・

そして、僕たちはイギリスの隠れ里?みたいな村にやってきた。
因みに日本からイギリスまでの移動は飛行機でした。

「今帰ったぞ!」

ナギがそんな村にある1つの家の扉を開けた瞬間――

「おっそいわー!!」

「ガフッ!!」

扉の向こう側から金髪の女性が現れて、ナギに掌底をくらわせた・
・しかも的確に顎を貫いた。

「半年間も帰らんとはなんじゃ!?! 言い訳があるなら聞くぞ? 言ってみろ!!」

そのままナギの胸倉を掴んで、ガクガクと揺する金髪の女性。

ナギは脳に効いてるのか、されるがままで・・・どうしよう? さつきから足がガクガク笑ってる!

下手に動いたら僕にも被害が来る!

「ん? ・・・なんじゃ? この子供は・・・」

動いてないのにロックオンされた!

女性の目が細くなり、睨まれたような感じた。

「まさか隠し子か!?!」

女性は両手をナギの胸倉から首に移動させた。

何で孤児ではなく、隠し子って思うのかな?

ってか、本格的にヤバイ! ナギが白目を向いて口から泡を吹き始めた!!

「説明しますから落ち着いて下さい!! 僕はナギさんの子供じゃありません!!」

女性の腕にしがみついて止める。

因みに今『ナギ』なんて呼び捨てしたら、さらに悲劇になると思っ

たからさん付けした。

それから家に入れてもらい、僕とナギの関係を説明した
因みにナギはダウンしてベットで寝てる。

「ふう・・・ふう・・・」

「落ち着きましたか？」

「・・・・・・・・」

肩で息している女性・・・アリカさんに水を差し出しながら聞く

「ああ、大丈夫じゃ。それにしても、あの『闇の福音』の息子だと
は驚きじゃな」

「・・・・・・・・」ジッ

アリカさんは水を飲んで落ち着いたのか、僕の顔を覗き込んできた
僕の顔に何か付いてるのかな？

ってか、さっきから僕の周りをうろちょろしてる女の子が気になる
んだよね。

髪はオレンジでツインテール歳は6歳〜7歳くらいで、どこことなく
アリカさんに似てるような気がする・・・妹さんかな？

「手配書や写真でみた事はあるが・・・似てないの？」

・・・ん？

何が似てないんだ？

顔をペタペタと触りながら首を傾げる。

横にいる女の子をチラッと見たら・・・僕の真似をして首を傾げた。

んっ・・・多分だけど予想はついてるから・・・

「エヴァとは血の繋がりはありませんよ？・・・戦争？孤児である僕をエヴァが育ててくれたんです」

さっきした説明では、僕とナギの関係と僕の自己紹介しか説明してないからね。

僕とエヴァの詳しい関係は言ってた無かったからか。

「それから此方は？」

アリカさんに女の子をチラッと見ながら聞く。

アリカさんの自己紹介しかされてないからね。

「アスナじゃ。アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアじゃ。仲良くしてやってくれ」

そう言ってアスナ・ウェスペリーナ・テオタ・・・長いな、アスナの頭を撫でながら紹介してくれた。

「よろしくね？アスナさん」

「・・・んっ」

ポフツ・・・ナデナデ

いきなりアスナに頭を撫でられた。

訳が解らずアリカさんを見ると、驚いた表情だった。

まあ、僕の方が小さいから撫でやすいのかな？

「アスナが初対面で、ここまで警戒心が無いなんて・・・」

アスナは警戒心が強い子なんだ・・・そうは見えないけど。

確かに無口で何を考えてるか解らない子だとは思ってたけどね。

「そうなんですか？」

「ああ、ちょっとした理由があるからの・・・そう言えば、志貴は私を見ても何とも思わんのか？」

「・・・？」

また訳が解らないぞ？

綺麗な人だとは思うけど、それ以上の事はないだろ？

人妻だし（重要）！！

人様のモノに手を出すほど落ちぶれちゃいないぜ！！

「私は魔法世界で、『災厄の女王』『災厄の魔女』『自らの国と民を滅ぼした魔女』などと呼ばれている存在じゃぞ！？」

顔をズイッと近付けながら言われた・・・目が血走っていて、かなり怖いです！！

この人犯罪者だったんだ。

全然解らなかったよ。

エヴァみたいな悪の威厳？も無かったからね。

「いや、それを言ったら僕の母親は『闇の福音』ですよ？悪の知名度ならコッチの方が上ですからね」

カラカラと笑いながら言う。

エヴァの昔話で（正当防衛で）滅ぼした国は50を超えるって言うってたからね。

エヴァの女・子供は殺さないって理念は、直接は殺さないだからね。王が死んで国が滅びる時の女・子供の被害なんてどうでもいいって言うってたし。

ギョッ

アスナがアリカさんの手を握った。

アスナなりに慰めてるのかな？

アリカさんはジッとアスナを見返して――

「・・・私も子供が欲しいな」

とアスナの手を握り返しながら言った。

何処から出てきた！！

何でそんな話題になったのさ！

「うん。私はナギと少し話してくる！」

そう言っアアリカさんは奥のナギがダウンしてる部屋には行っていた。

「ナギッ！！ちょっと話があるのじゃ！」

「・・・う？・・・どうした？・・・ちよっ！何で服を脱ぎ始める！？ズボンに手をかけてくる！？」

「・・・えーっと・・・僕達はどうしよう？

「・・・？」

アスナを見たら首を傾げられた。

今を見て解った・・・アスナは気にしてない。

「志貴！助けろ！！」

「し、志貴は入ってきてはならんぞ！！」

「いいから入って助けろ！師匠命令だ！！」

「入ったら・・・ユルサナイ」

ゾクッ

悪寒が！！

「アスナ、外に行こうか？」

「・・・なんで？」

首を傾げられた。

此処にいたくないからです！

そして始めて声を聞きました！

「村を案内してくれないかな？」

「・・・んっ、わかった」

アスナが家から出て行ったので、僕も続いて外に出た。
僕はナギよりもアリカさんに服従した。

第6話（前書き）

後書きにアンケート？があります

よろしくお願いします

第6話

—side・志貴—

ナギに弟子入りして数ヶ月が過ぎた・・・正確には1989年5月11日だ。

今まではナギに付いて行って、各地で救援作業を手伝った。

魔法世界にも1ヶ月ほど滞在して、ナギにいろんな人を紹介された。魔法世界では救援活動の他に、夜盗・盗賊などとの戦闘（殺し合い）もした・・・僕には殺さずに相手を制圧する力量は無かったから。

そしてナギ曰く、戦闘では性格が変わるらしい。

別人と思うほど違うって言われた。

一人称も僕から俺に変わってたらしい・・・全然気が付かなかったよ。

エヴァと一緒に居た時は、いつも隠れてて見てただけだからね。

試合（模擬戦）もチャチャゼロだったから、死合い（殺し合い）

はした事無いんだよね。

一応ナギには「普段の志貴は優し過ぎるから、切り替えがあった方がいいんだよ」って言われた。

それからは意識して切り替えるようにしてる・・・全然まだ駄目だけどね。

そして只今——

「・・・右手に魔力・・・左手に気・・・合体っ」

ナギの家の前でアスナに高難度技法の咸卦法を教わっている。

ナギは久々に家に帰って来たから、アリカさんに捕まって家族会議OHMASHIをしている。

ナギが助けを求められたけど、何時も通りにアリカさんに差し出し

たよ！

そんな事よりもアスナだ。

アスナが両手を合わせたら、淡い光がアスナの体を包んだ。

それによりアスナの死の線が薄くなった……あつ、今の僕
じゃアスナを殺せないな^{に勝てないな}

最近では直視の魔眼を随時発動させてる……体を馴れさせるために
ね（笑）

始めて発動させた時は、頭痛が酷かった……声を上げて頭を抱え
て転げ回ってしまったorz

今は兎に角アスナに教わっているを咸卦法やらなきやな！！

直視の魔眼を解除して、精神を統一する。

「右手に魔力、左手に気を……ッ！」

両手を合わせた瞬間、バチツと音を立てて弾かれた。

う……む、やっぱり難しいな。

「……もつとリラックスして」

ぽふっ……ナデナデ

落ち込んだと思われたのか、また頭を撫でられた。

「すう……はぁ……魔力、気……合体ッ！！」

もう一度深呼吸してから、再度挑戦する……今度は呆気なく出来
てしまった。

「……凄い」

アスカが驚いた表情をしたけど、アスナは一発で成功したって聞いているけど・・・勿論ナギにね。

「さっきと何が違ったんだ？」

特に乱神・改神モードも使っていないから、精神の問題なのかな？

まあ、考えてもしようがないか。

出来たんだからそれで良いか！！

「・・・少し遊ぼ？」

アスナが咸卦法のまま、準備体操をする。

それから・・・シャドーボクシング！？

・・・え？

咸卦法同士で試合（模擬戦）するの！？

ってか、アスナの遊びは模擬戦なんですか！？

「・・・どうして後退りをするの？」

無意識にアスナから離れてた？

あ・・・アスナが笑った？あの無表情のアスナが？

何故だろう？嬉しい筈なのに、ナギに向けるアリカさんの笑顔とダブった・・・OHANASHIする時の笑顔と・・・寒気が！！

「・・・じゃあ、行くよ？」

一瞬にしてアスナが消えた。

―side・三人称―

「ガフッ！」

アスナは瞬動で志貴に近付いて顔面を殴りつけた。
志貴はボールのように跳ねたがら吹っ飛ばされた。

「ッ！！・・・そう言えば、近距離戦って教わった事無いな」

志貴はユラリと立ち上がりながら、アスナを無感情で見る。

志貴はエヴァ・ナギに魔法の訓練を教わっているが、近距離の格闘術は一切教わっていない。

チャチャゼロとは乱神モード（意識無し）の時の一回だけである。

夜盗・盗賊の時は膨大な魔力で、力任せに遠距離魔法で殺したのだ。
霊長の守護者

「今のは始めて見たな・・・こうか？」

今度は志貴が瞬動でアスナの背後に回って、アスナが振り返った瞬間に頬を殴り飛ばした。

「意外に簡単に出来たな」

志貴は首をコキコキ鳴らしながら、アスナが立ち上がるのを待った。
アスナは立ち上がった瞬間に瞬動で志貴に迫る。
志貴も同じく瞬動でアスナに向かった。

「・・・ッ！」

「・・・ふっ！」

2人が交差する時に、お互い右ストレートを放って拳同士がぶつかる。

志貴よりもアスナの方が咸卦法の完成度が上なので、アスナに押し負けて志貴が吹っ飛んだ。

志貴は四つん這いになりながらも着地して、左の肘打ちを後方に回転しながら放った。

「まだまだだな！」

志貴の後ろにはアスナが居て、アスナの右ストレートの手首を志貴の肘がとらえていた。

「受け止めてみる」

志貴は肘打ちをされて体制を崩したアスナの顔面に右フックを放った。

その瞬間、アスナは怖がって目をギュッと閉じてしまった。

—side・志貴—

俺がアスナの顔面に右フックを放った瞬間に、アスナが怖がって目をギュッと瞑った。

「・・・ッ！」

無理矢理体を停止させる。

なんとか右手がアスナに触れる瞬間に止める事が出来た。

・・・危なかった。

いろいろ意識が切り替わってた。

「・・・ふう、もう終わりでいいでしょ？」

突き出していた右手でアスナの右頬を撫でながら言う。

その際無詠唱で治癒魔法をかける。

俺・・・僕の治癒魔法は掠り傷を治せる程度だ。

エヴァもナギも治癒魔法が得意じゃないからね。

だから、初級の治癒魔法しか習ってないんだよ。

今覚えた魔法は『風』『雷』『闇』『氷』の四種類だね。

「んっ・・・わかった」

アスナが僕の右手に添えるように左手を重ねてきた・・・若干嬉しそうに目を細めながら。

「2人ともずいぶん仲良くなったの？」

家の中からお肌がツルツルしたアリカさんが出て来た・・・いつもより綺麗に見える。

「あゝ、腰が痛てえ」

アリカさんの後ろから腰をトントンと叩きながら、ゲッソリしたナギが出て来た・・・僕は何も言わないぞ？

因みに今の時刻は昼12時半です☆

「志貴、今から出掛けるぞ」

ナギに体を伸ばしながら言われた。

別に良いんだけど、何処にだろう？

それから帰ってきて直ぐに出掛けたら、アリカさんに怒られないのかな？

チラツとアリカさんを見たら、アスナと普通に話してる・・・多分一緒に行くんだ。

って事は仕事じゃないな。

「何処に行くの？」

「日本だ。友人に子供が出来たから御祝いにな」

・・・・・・どうしよう。

今僕は、ナギの中にそんなマトモな考えがある事にかなり驚いた！

「私とアスナも準備するから待っておれ」

そう言ってアリカさんが家の中に入っていった。

「姫子ちゃんに咸卦法を教わったみたいだな？結構難しい技なんだから」

マジマジと見られながら言われた。

なんで知ってるんだ？

・・・自分の両手を見て気付いた。

いまだに展開してたわ。

直ぐに解く。

「・・・ハア・・・ハア」

脱力感が半端ない！

アスナはそんな事無そうだったな・・・初めてだったからかな？

「女の準備は長いって言うからな。ゆっくり休んどけ」

ナギが自分のローブを羽織りながら、俺のローブを渡された。

因みに俺のローブの色は黒だったりする。

俺的にはローブよりもコートの方が良かったんだけどね。

「・・・・・・・・使い魔か」

地面にペタンと座って村をボーっと眺めてたら、1人の老魔法使いがフェレットを連れて話しかけてた。

昔エヴァに動物や悪魔を使い魔にするって聞いたことがある。

「使い魔がどうした？」

僕の呟きが聞こえたのか、ナギが話しかけてきた。

「使い魔が欲しいなあって・・・ナギは居ないの？」

ナギが顎に手を当てて考える素振りをする。

「一応モツとシチミってのが居るが・・・最近は会ってないな」

・・・・・・・・何故食べ物？

モツ、シチミ・・・連想できねえ。

「動物？悪魔？」

「拾った奴等だからよく解らんけど・・・多分悪魔だな。アニメデフォの緑の鶏と手足のない猫だな」

うんっ！

尚更解らなくなったorz

「志貴はどんなのを使い魔にしたいんだ？」

「まだ考え中」

動物・悪魔どっちが良いかな？

正直動物は在り来たりだから、悪魔かな？

「一生の付き合いになるかもしれないんだから、じっくり考えた方が良いぞ？」

「うん、わかった。」

「終わったぞ！」

ちょうどアリカさんとアスナの準備が終わったみたいだ。

アスナは白のセーターで赤のミニスカートだ。

アリカは・・・何も言いません。

あえて言うなら、思い出の洋服でも寒くないのですか？

—side・ナギ—

詠春に子供が出来たらしいから、御祝いの言葉を言いに行く事になった・・・アリカに言われなきゃ行かなかったけどな。

そして一週間かけて日本の京都に着いた。

「へー、京都に来たのは初めてだよ」

志貴が珍しそうにキョロキョロしてやがる。
こうやって見れば年相応の子供だな。

「・・・コッチ」

姫子ちゃんが志貴の手を繋いで引っ張っている。
まるで兄妹みたいだな・・・似てないけど。

「2人共はしゃぐのは良いがもう見えてきたぞ？」

アリカの言うとおり詠春の家が見えてきたな。

詠春は前線から離れて、今は関西呪術協会の長をやってるんだったな。

「久しぶりだな、ナギ。」

門の所に詠春が立っていやがった。
一応予想到着時刻は言っていたからな。

「いらっしやいませ。ナギ様、アリカ様、アスナ様、それから・・・」

詠春の周りに居る巫女さんの代表が迎えてくれた。
そう言えば志貴の事を話してなかったな。

「僕の名前は七夜志貴です。ナギに弟子入りしました。」

俺が紹介しようとしたら、志貴が自分で紹介した。

「ナギが弟子をとったって噂があったが、君だったのか。こんなので本当に良かったのかい？」

「デメエ、何言ってやがる！」

俺だって教えるのが下手ってのは知ってるよ！

何度も師匠のように上手く説明できねえって頭を抱えたよ！

「七夜か（ボソツ）・・・そっか！」

いきなり志貴が大声を出しやがった。

「どうしたんだよ？ いきなり」

「使い魔だよ。名字から取って、七罪にしようと思うんだ」

七罪？

何だっけ？

「七罪と言ったら、あの七つの大罪かなか？」

詠春に言われて思い出した。

七罪は大罪ごとに悪魔が表されるからな・・・って！

「まさか魔王クラスを使い魔にしようとしてるのか！？」

「うん。七夜・・・七罪をも飲み込む夜（闇）って意味らしいからね」

・・・マジか！

エヴァはそんな意味を込めて名付けたのかよ！？

第6話（後書き）

型月で七罪に当てはまるキャラって何ですかね？

参考までに

傲慢↓金ピカ

嫉妬↓エミヤ

憤怒↓バーサーカー

怠惰

強欲

暴食↓セイバー

色欲

月姫のアルトの使い魔レンを出したいですね（笑）
どこに当てはまりますかね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9043x/>

ネギま！－1/100の転生者－

2011年11月16日08時17分発行